

## 英語の名詞wordの多義構造: 認知意味論的分析

著者	皆島 博
雑誌名	福井大学教育地域科学部紀要 第I部 人文科学(外国語・外国文学編)
巻	65
ページ	9-21
発行年	2009-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/2408">http://hdl.handle.net/10098/2408</a>

# 英語の名詞 *word* の多義構造：認知意味論的分析

皆 島 博

(2009年9月28日受付)

## 1. はじめに

本稿では、英語の名詞 *word* を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスについて、認知意味論的な観点からの分析を行う。英語の *word* という語は、使用頻度も比較的高く、多くの意味で使用される名詞であると思われるが、このことの証左の一つとして、英語の *word* にはどのような日本語の訳語が対応するのか、学習英和辞典『エクスプレスEゲイト英和辞典』（ベネッセコーポレーション、2007年）に挙げられている訳語と用例を引用してみよう。

### (1) a. 語, 単語：

an English word (英単語)

This dictionary contains over 50,000 words. (この辞書には5万語以上が入っている)

### b. ことば；(短い)話；歌詞：

I don't believe a word she said. (彼女が言ったことはひとつも信じていない)

I can't find any words to describe his kindness. (彼の親切さを表現することばが見つからない)

Write the answer in your own words. (自分自身のことばで答えを書きなさい)

I like the words of this song. (私はこの曲の歌詞が好きだ)

### c. 約束；(助言などの)ひとこと：

a man of his word. (約束を守る男性)

a word of advice (ちょっとしたアドバイス)

She kept [broke] her word. (彼女は約束を守った [破った])

### d. 命令；指示：

We obeyed his word. (我々は彼の指示に従った)

### e. 知らせ；情報；伝言：

I have no word of his whereabouts. (彼の所在については聞いていません)

上の例を見ると、英語の *word* には「語」「単語」「ことば」「(短い) 話」「歌詞」「約束」「(助言などの) ひとこと」「命令」「指示」「知らせ」「情報」「伝言」などさまざまな日本語の訳語が充てられている。このように、英語の *word* に対して、多数の日本語の訳語が対応する、という事実が示唆するのは、英語の *word* という名詞は多義性を備えた語である、ということである。

本稿では、このように英語の *word* が提示するさまざまな意味が無秩序に派生してきたのではなく、プロトタイプのコアの意味(基本義)を起点として、何らかの動機付けによって、相互に関連のある転義を派生し、それぞれが有機的なネットワーク(放射状カテゴリー)を構成する、ということを示そうというものである。本稿の目的は、英語の名詞 *word* に関して、次の3点について、認知意味論的な立場から記述<sup>1)</sup>をおこない、それらを明らかにすることである。

- (2) a. *word*の複数の意味(多義)の認定
- b. *word*のプロトタイプの意味の認定
- c. *word*の意味拡張と動機付けの認定

## 2. 語の意味拡張と放射状カテゴリー

一般に、1つの語が2つ以上の意味を持つ場合、その語は「多義的」であるといい、複数の意味・語義をそなえた語を「多義語」という。このような語の「多義性」について、認知意味論では、「カテゴリー拡張」(category extension)の結果生じたもので、そのカテゴリーは中心的な事例から、その他のいくつかの非中心的な事例へと四方八方に拡張していく、と捉えている(Lakoff 1987, Sweetser 1990, Taylor 1995など)。したがって、認知意味論におけるカテゴリーは、アリストテレス以来、西欧哲学で用いられてきた「古典的カテゴリー観」に基づくものではない。

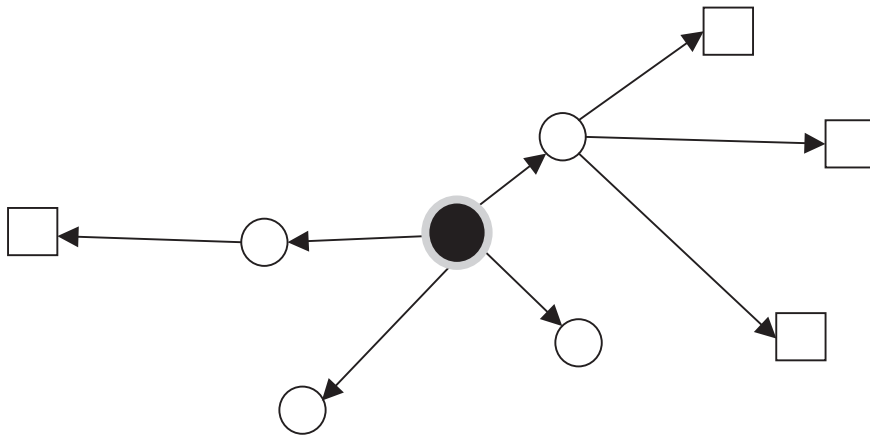
古典的カテゴリー観では、カテゴリーのメンバーの要件は[+] (プラス)か[-] (マイナス)かで区別できる必要十分条件によって定義される集合であり、全てのメンバーがその必要十分条件を満たしており、メンバー間にそのカテゴリーのメンバーとしての良し悪しや中心・周辺の違いはないものと考えられてきた。しかし、このようなカテゴリー観は自然言語の「語の意味の集合」には当てはまらないことが、様々な研究者(Wittgenstein 1978, Labov 1973, Rosch 1975, Lakoff 1987など)によって指摘されてきた。

認知意味論におけるカテゴリー観(非古典的カテゴリー観)では、カテゴリーのメンバーの要件は[+]か[-]かで区別されるものではなく、メンバー間にはメンバーとしての良し悪しと中心・周辺の別があり、カテゴリーには明確な境界線は存在しない、と考える。このようなカテゴリーとして、最も一般的に見られるのが、中心となるプロトタイプが存在し、そこから何らかの動機付けによって複数の方向へとカテゴリー拡張が展開しているようなカテゴリー、すなわち「放射状カテゴリー」(radial category)と呼ばれものである。自然言語の語の意味を1つのカテ

ゴリーとして捉えた場合、古典的カテゴリーよりも、このような非古典的なカテゴリー観の方がよく当てはまると思われる。

放射状カテゴリーは、Lakoff（1987）で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心的（プロトタイプの）メンバーを取り囲むように2次的に周辺の（非プロトタイプの）メンバーが位置づけられ、その2次的なメンバーを中心にしてさらに3次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう（辻 2002:238）。放射状カテゴリーのイメージを示すと次のようになる：

図1：放射状カテゴリーのイメージ（辻 2002:238）



上のイメージで、中心に位置する●は1次的メンバー（プロトタイプ）を、○は2次的メンバーを、□は3次的メンバーを表している。すなわち、プロトタイプの●から○へ、さらに○から□へとカテゴリー拡張が展開している。

なお、認知意味論において、このカテゴリー拡張を引き起こす要因（動機付け）として主要な役割を演じるのが「隠喩（メタファー）」「換喩（メトニミー）」「提喩（シネクドキ）」と呼ばれる3つの比喩（いわゆる、レトリック）である。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、初山・深田（2003）などにしたが、次のように定義しておく。

(3) a. メタファー：

二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。

b. メトニミー：

二つの事物の間に存在する何らかの近接性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて

他方の事物を表す。

c. シネクドキー：

一般的な意味を持つ形式を用いて特殊な意味を表す、逆に、特殊な意味を持つ形式を用いて一般的な意味を表す。あるいは、全体を表す形式を用いて部分を表す、逆に、部分を表す形式を用いて全体を表す。

### 3. 英語のwordの意味拡張

#### 3.1 基本義：〈語・単語〉

管見の及ぶ限り、英語の名詞 *word* について、認知意味論の枠組みでその多義構造について論じた先行研究<sup>2)</sup> はなかったように思われる。英語の *word* の意味拡張のプロセスを追うにあたり、まずはその基点となる基本義（プロトタイプの意味）を仮定することから始める。英語の *word* の最も基本的な用法は次のようなものであると思われる。

- (4) a. The first word that many babies speak will be “mama”.  
(赤ん坊の多くが初めて話すことばは「ママ」だろう)
- b. I get all tongue-tied when I try to pronounce this difficult word.  
(この単語の発音は難しくて舌をかみそうだ)
- c. If you don't understand the meaning of a word, look it up in the dictionary.  
(意味のわからない言葉は辞書を引きなさい)
- d. Due to space limitations you are requested to keep your summary within 200 words.  
(紙面が限られております都合上、要約は200語以内に収めて下さい)

直感的にも英語の *word* は、人間が口（発声器官）から出す意味を持った言葉一語、あるいは、言葉一語一語の集まり（必ずしも、文法的に正しく整えられた文の形式を備えている必要はなく、辞書などに収録された単語一語一語あるいは収録された単語の総体でもよい）を指しているように思われる。さらに上の用例が示すように、英語の *word* には、話し言葉（音声言語）と書き言葉（文字言語）の側面があり、人間の口から発せられたもの（聴覚に訴える）と印刷（あるいは筆記されたもの）されたもの（視覚に訴える）との区別が存在する。

次に、いくつかの英英辞典における *word* の見出しの第一番目に挙げられた定義を比較してみよう。

- (5) a. a single unit of written or spoken language  
(*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners* CD-ROM 2nd Edition, 2007)

- b. a single unit of language which has meaning and can be spoken or written  
(*Cambridge International Dictionary of English*, 1995)
- c. the smallest unit of language that people can understand if it is said or written on its own  
(*Longman Dictionary of Contemporary English*, <http://www.ldoceonline.com/>)
- d. sound or combination of sounds that expresses a meaning and forms an independent unit of the grammar or vocabulary of a language  
(*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 1989)
- e. a) a speech sound, or series of them, serving to communicate meaning and consisting of at least one base morpheme with or without prefixes or suffixes; unit of language between the morpheme and the sentence b) a letter or group of letters presenting such a unit of language, written or printed usually in solid or hyphenated form  
(*Webster's New World Dictionary of American English Third College Edition*, 1988)

上の英英辞典の定義に共通している word の第一義的な意味は「話しことば、または、書きことばとしての形式を備え、かつ、何らかの意味を担った言語の一単位」であって、日本語でいえば「単語」(あるいは「語」)<sup>3)</sup> という名詞が最もよくあてはまると思われる。したがって、word のプロトタイプの特徴として、次のような観点から仮定することができるであろう：

- (6) a. 要素：音声（音素）から構成される  
b. 構造：単独で使用される言語上の一単位  
c. 機能：コミュニケーションで使用され意味を伝達する

つまり、word は、音声言語としての基本的な言語の一単位、すなわち、プロトタイプ的な意味として、(音声言語としての)〈語・単語〉(一語)を仮定しておくのが最も妥当であると思われる。ここで、文字言語としての word はプロトタイプに含まれるのか、ということが問題になるが、百科事典的知識<sup>4)</sup>として、文字体系を持たなくとも、音声を持たない言語は皆無であるということから、word の本質は音声言語としてのものである、と仮定しておくことが妥当であるように思われる。むしろ、文字言語としての word の意味は、音声言語としての word が属する「聴覚」の領域から「視覚」の領域に写像されたこと、すなわち、メタファー（隠喩）によって派生したと捉えることができる。したがって、典型的には、音声言語として個々に発せられた「ことば」(単体としての単語一語)がこれに最もよく該当する事例であると考えられる。

### 3.2 転義：〈語・単語〉から〈ひとこと・短い発話〉へ

上で word の基本義（プロトタイプの意味）を（音声言語としての）〈語・単語〉（一語）と仮

定したように、*word*は文字通り「口から発せられた単語一語、または、ひとこと」という意味で用いられる。

- (7) a. Even a child would know such a simple word.  
 (こんな簡単な単語は子供でさえ知っている)  
 b. The little boy's mother washed his mouth out with soap for using a dirty word.  
 (その男の子の母親は汚いことばを使った罰として口の中を石鹸で洗った)

しかし、文字通り「単語一語、ひとこと」という意味で用いられることもあれば、必ずしも文字通りの意味ではなく「複数の単語が連なってできたごく短い発言」という意味で用いられることもある。つまり、部分によって全体を表すというシネクドキーの原理が働いているのである。

- (8) a. He always says one word too many.  
 (彼はいつも一言多いんだよ)  
 b. The situation was brought under control by one word from the president.  
 (社長の鶴の一声で一気に事態は収拾された)

したがって、ここでは〈語・単語〉から〈ひとこと・短い発言〉への意味拡張を認定することができるであろう。さらに指摘しておかなければならないのは、この方向に転義した*word*は原則として単数形で使用されるという点である。つまり、基本義〈語・単語〉の「単体としての語・単語一語」という側面がここでの意味拡張の基盤となっているのである。

### 3.3 転義：〈ひとこと・短い発言〉から〈最適な語・合い言葉〉へ

少数の単語からなる短い発言は、例えば、何事かを端的に表現するのにふさわしい言葉として発せられる。

- (9) a. In dealing with difficult children, "patience" is the word.  
 (難しい子供を扱うのに「忍耐」が合い言葉(ぴったりの言葉)だ)  
 b. Their word is "law." (i.e. their commands must be obeyed.)  
 (彼らの合い言葉は「法律」だ)

ここで*word*は特定のことがらを描写するために用いられている。つまり、〈ひとこと・短い発言〉から〈最適な語・合い言葉〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.4 転義：〈最適な語・合い言葉〉から〈合図・命令〉へ

特定のことがらをぴったりと描写することばという意味でwordは用いられるが、例えば、事前に取り決めた特定のことがらを知らせる手段としてもことばは用いられる。

- (10) a. On his word, they all moved forward.  
 (彼の合図で彼らはみんな前進した)
- b. The troops will go into action as soon as their commander gives the word.  
 (その一隊は司令官が命令を下せば直ちに出勤することになっている)

ここでwordは特定の行動やアクションを誘発または要求するためのあらかじめ取り決められた号令として用いられている。つまり、〈最適な語・合い言葉〉から〈合図・命令〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.5 転義：〈合図・命令〉から〈約束・保証〉へ

英語のwordは特定の行動を触発するためにあらかじめ当事者の間で取り決めた言葉による合図という意味で用いられたが、さらに当事者の一方が遂行すべきと取り決められたことがら、あるいは遂行することが期待されることがら、という意味でも用いられる。

- (11) a. Larry always keeps his word.  
 (ラリーはいつも約束を守る)
- b. You can take her at her word.  
 (彼女の言葉は信用できる)

ここでwordは2者の中で片方が遂行すべしと決められた特定のことがらを意味している。つまり、〈合図・命令〉から〈約束・保証〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.6 転義：〈ひとこと・短い発話〉から〈知らせ・たより〉へ

少数の単語からなる短い発話は、例えば、特定のことがらを誰かに伝えるために用いられる。

- (12) a. I have word that he will arrive tomorrow.  
 (彼が明日到着するという知らせを聞いた)
- b. I've written her twice but I haven't heard a word from her.  
 (彼女に2回手紙を書いたが便りが無い)



ここでwordは特定の情報を他者に伝えるためのもの、という意味で用いられている。つまり、〈ひとこと・短い発話〉から〈知らせ・たより〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.7 転義：〈知らせ・たより〉から〈神の言葉・福音〉へ

英語のwordは〈知らせ・たより〉という一般的な情報や考えの伝達という意味でも用いられる一方で極めて特殊な文脈で用いられることがある。

(13) a. The Bible contains the Word of God.

(聖書には神の言葉が書かれている)

b. I am an evangelist called to preach the Word of God.

(私は福音を説くために招かれた伝道者です)

ここでwordは神からの知らせ、あるいは、神からの言葉という非常に限定された意味で用いられている。つまり、〈知らせ・たより〉から〈神の言葉・福音〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.8 転義：〈語・単語〉から〈発言・談話〉へ

音声言語としての〈語・単語〉が集まると、それより大きな言語単位である「文」「文章」「発話」「談話」などの「言語表現」へと展開していく。ここでは「部分」(=word)によって「全体」(=words)を表すというシネクドキーの原理<sup>5)</sup>が働いている。

(14) a. I can't put my joy into words.

(この喜びはとても表現できない)

b. Tom's words are often harsh, but his heart is in the right place.

(トムはよく厳しい言い方をするが悪意はないんだ)

ここには〈語・単語〉から〈発言・談話〉への意味拡張を認定することができるであろう。つまり、個々の単語が集合してできた、ある程度まとまった分量をもつ「言語表現」という意味で用いられているのである。さらに指摘しておかなければならないのは、この方向に転義したwordは原則として複数形wordsで使用されるという点である。基本義〈語・単語〉が集まってできた複数の単語の集合体としての〈発言・談話〉という意味がここでの意味拡張の基盤となっているのである。

### 3.9 転義：〈発言・談話〉から〈スピーチ・演説〉へ

個々の単語が集合してできた、ある程度まとまった分量をもつ「言語表現」はさまざまな場面で使用される。何らかの目的で聴衆の前で行われる〈発言〉や聴衆に対して伝達される〈談話〉がそうである。

(15) a. Ms. Smith will now say a few words.

(スミスさんよりおことばをいただきます)

b. These words are those of J.F. Kennedy, whom Bill Clinton resembles, in a famous speech delivered 30 years ago.

(これらのことばはJ.F.ケネディ(ビル・クリントンに似ている)が30年前に行った有名な演説からのものである)

ここでwordsは一人の話し手が何らかの目的で聞き手に対して伝える言語表現という意味で用いられている。つまり、〈発言・談話〉から〈スピーチ・演説〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.10 転義：〈発言・談話〉から〈会話・対話〉へ

一人の演説者が一方通行的に聴衆に与える言語表現という意味でwordsは用いられるが、二人の当事者を想定しなければならない言語表現もある。

(16) a. We exchanged a few words.

(私たちは少しことばを交わしました)

b. Can I have a few words with you?

(ちょっとお話してもいいですか)

ここでwordsは二人の当事者の間で何らかの目的で交わされる言語表現という意味で用いられている。つまり、〈発言・談話〉から〈会話・対話〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.11 転義：〈会話・対話〉から〈口論・論争〉へ

上で仮定したwordsの転義〈会話・対話〉とは二人の当事者の間で何らかの目的で交わされる言語表現、あるいは、談話のことであるが、二人の当事者の間で一方が自分の正当性を主張するという特定の目的で交わされる談話もある。

- (17) a. Jack and Jill had words over which one spilled the pail of water.  
 (ジャックとジルはどちらがバケツの水をこぼしたかで口論していた)
- b. I had words with Charlene last night over whose turn it was to wash the dishes.  
 (どちらが皿を洗う番かを巡って、私は昨夜シャーリーンと口げんかした)

ここで *words* は、二人の当事者の間で、どちらかの正しさ、あるいは正当性を明確にするという特殊な目的で交わされる言語表現という意味で用いられている。つまり、〈会話・対話〉から〈口論・論争〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.12 転義：〈発言・談話〉から〈セリフ〉へ

英語の *word* は〈発言・談話〉という一般的な言語表現という意味で用いられる一方である種の特殊な状況で用いられることがある。〈発言・談話〉という意味が特殊化（一般的な形式を用いてより特殊な意味を表すシネクドキー）した場合である。

- (18) a. words in movies  
 (映画の台詞)
- b. I was impressed as the character in the movie said his final words.  
 (映画の中の登場人物が最後のセリフを言った時は感動した)

ここで *words* は、演劇、芝居、映画など特殊な状況で使用される（あるいは使用のために創作された）言語表現という意味で用いられている。つまり、〈発言・談話〉から〈セリフ〉への意味拡張を認定することができるであろう。

### 3.13 転義：〈発言・談話〉から〈歌詞〉へ

上で仮定した転義〈セリフ〉は特殊な環境で英語の *word* が使用される場合に派生してきた意味であった。これと同じように別の特殊な状況で用いられる場合、別の方向での特殊化した意味が派生する。

- (19) a. the words of Moon River  
 (「ムーンリバー」の歌詞)
- b. I can hum the tune, but I don't know the words.  
 (その曲はハミングできますが、歌詞を知りません)

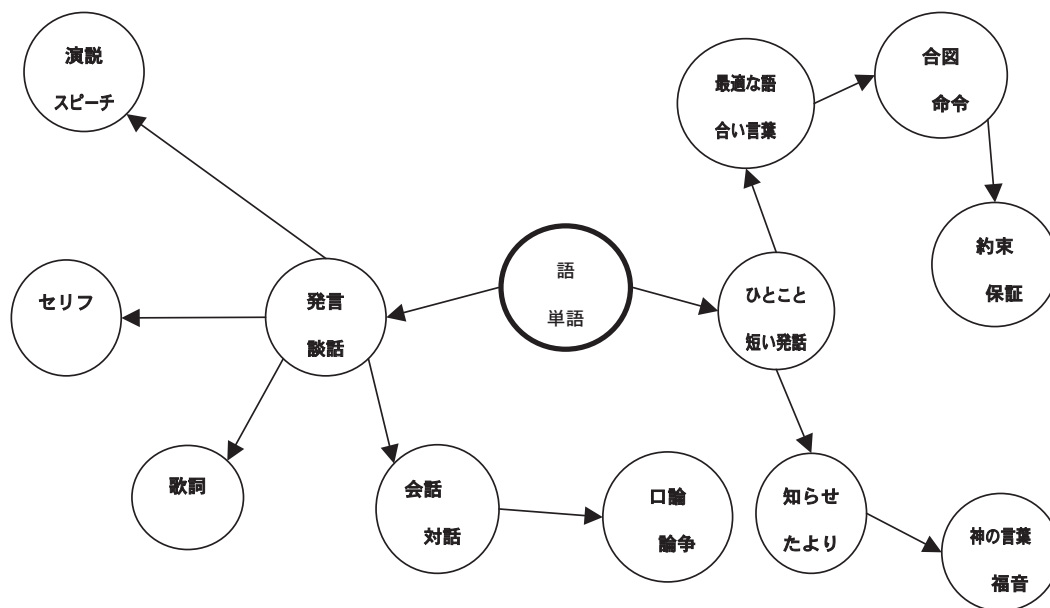
ここで *words* は、歌、歌曲、オペラなど特殊な状況で使用される（あるいは使用のために創作

された) 言語表現という意味で用いられている。つまり、〈発言・談話〉から(歌・曲の)〈歌詞〉への意味拡張を認定することができるであろう。

#### 4. おわりに

本稿では、英語の名詞wordについて、認知意味論的観点から分析し、(i) wordが多義性を示す語であり、(ii) 意味拡張の結果生じてきたそれぞれの意味(=転義)はプロトタイプの意味(=基本義)を出発点として、そこから派生してできたもので、それぞれの転義は相互に有機的なつながりをもった放射状カテゴリー(=意味のネットワーク)を構成する、ということを主張した。次に示す図のように、英語の名詞wordは多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。

図2：英語の名詞wordの多義構造：意味のネットワーク



なお、それぞれの転義への意味拡張の動機付けとなる要因については、シネクドキーの原理が大きな位置を占めている。認知意味論において、意味拡張の動機付けの要因となるものとしては、他にメトニミーとメタファーが重要なものであるが、メトニミーについては、wordの意味拡張の動機付けとしては関与していないように思われる。メタファーについては、上の節で述べたように、wordの本質(一義的意味)は音声言語(=話し言葉)としてのものであり、文字言語(=書き言葉)としての副次的なwordの意味を派生させるときに働いているように思われる。つまり、音声言語としてのwordの基本義と転義が一義的なものであり、文字言語としてのwordの

意味はメタファーによって派生したもの（例えば、音声言語の〈語・単語〉⇒文字言語の〈語・単語〉、音声言語の〈セリフ〉⇒文字言語の〈セリフ〉）にすぎないのである。

#### 【注】

- 1 多義語の認知意味論的分析の手法については舂山（2002）を参照。
- 2 瀬戸（2007）が該当するともいえるが、これは研究論文ではなく、認知意味論の枠組みで執筆された辞書であるため一応先行研究からは除外した。
- 3 「文法上の意味・職能を有する、言語の最小単位。文の成分となる。」（広辞苑第五版）、「言語単位の一。文構成の最小単位で、特定の意味、文法上の職能を有するもの。語。」（ハイブリッド新辞林）など国語辞典における「単語」の定義との共通点が多い点が日英対照言語学的見地から興味深い。
- 4 認知意味論では、百科事典的知識と言語的知識とを厳密に区別しない。したがって、意味の記述において、百科事典的知識を盛り込むことも当然ながら重視される（辻2002:206-207）。
- 5 査読者より、*word*の複数形*words*が〈発言・談話〉を意味することをシネクドキーによるものとみなすことには論理の飛躍があるのではないかという趣旨のコメントをいただいた。しかしながら、単数・複数の区別は基本的には形態論上のものであり、概念的な意味においても違いが生じているわけではない。単数*word*〈単語〉⇒複数形*words*〈単語の集まり〉⇒*words*〈文・文章〉⇒*words*〈発言・談話〉という意味拡張が展開したと捉えればシネクドキーにより派生した転義であると考えられる。

#### 【参考文献】

- Labov, W. (1973) "The boundaries of words and their meanings." In: C.J.N. Bailey and R.W. Shuy (eds.) *New ways of analyzing variation in English*. Washington: Georgetown University Press. 340-73.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: what categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 舂山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京: 研究社.
- 舂山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 東京: 大修館書店, 73-134.
- Rosch, E. (1975) "Cognitive representations of semantic categories." *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1997) 「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一 『文化発想とレトリック』 94-177. 東京: 研究社.
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』 東京: 小学館.
- Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic categorization: prototypes in linguistic theory* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』 東京: 研究社.
- Wittgenstein, L. (1978) *Philosophical investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

**【参照辞典】**

*Cambridge International Dictionary of English*, 1995

*Longman Dictionary of Contemporary English*, <http://www.ldoceonline.com/>

*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners* CD-ROM 2nd Edition, 2007

*Merriam-Webster Online*, <http://www.merriam-webster.com/>

*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 1989

*Webster's New World Dictionary of American English Third College Edition*, 1988

『エクスプレスEゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション，2007年

**【用例出典】**

CD-ROM Asahi Press SENTENCE，朝日出版社，2002年

英辞郎 on the WEB: <http://www.alc.co.jp/>